

# 野菜

## 1 秋雨・台風対策

9月は秋雨や台風の接近で、多雨や強風による気象災害が心配な時期となります。

事前対策として露地栽培では、水はけの悪い畑では周辺に排水溝（明渠）を掘り、長時間滞水しないようにしましょう。また、強風に備え、ナガイモやキュウリ、ナス、ピーマン等の支柱やネットが倒れないよう、補強・補修しておきます。パイプハウス等の施設では、台風の強風による倒壊を防ぐため、マイカー線やビニペット等にゆるみが無いか点検し補修しておきましょう。強風時の最終手段として、フィルムを除去し施設の倒壊を防ぐこともありますので、安全に十分配慮しつつ、状況に応じて判断しましょう。

台風通過後や秋雨の晴れ間には、風雨により葉が傷み、病害が発生する可能性が高くなりますので、速やかに殺菌剤の散布ができるように準備しておきましょう。降水量が多い場合は、べと病や白さび病等の「かび(糸状菌)」による病害、また、残暑となり気温が高い場合は軟腐病等の細菌性の病害やハダニ等の害虫の発生が増えますので注意します。

## 2 アスパラガス

梅雨明け後の、高温乾燥傾向で、病害は全般に少発生でしたが、今後の秋雨などが病害の発生に影響します。また、気温 17℃以下となる頃から養分の転流が始まるため、地上部の茎葉は健全な状態で維持することが、来年度の収量の確保につながります。

### (1) 茎枯病防除

茎枯病の発生した茎(罹病茎)は放置すると伝染源となるため、薬剤を散布しても十分な効果がみられない場合があります。必ず、罹病茎を地際から切除して持ち出し、焼却または埋設して処分します。罹病茎を処分後、株元からていねいに農薬散布をしましょう。

### (2) 台風対策

台風前に支柱やマイカー線のゆるみを点検、補強し、倒伏を防止します。台風や集中豪雨によりほ場内が滞水した場合は、明渠(側溝)を設置して排水を促し、24時間以上滞水しないようにします。また、速やかに殺菌剤を散布して病気の発生を抑制します。

### (3) かん水

かん水を継続することは、茎葉を健全に維持して、鱗芽の形成や貯蔵養分を増加させる効果があります。病害予防のためには、株元かんすい等により、茎葉を濡らさないようにします。また、畝間かん水を行う場合には、長時間滞水しないようにしてください。



写真1 茎枯病の発生圃場



写真2 茎枯病斑

(黒い点の中に病原菌が詰まっている)

## 3 トマト

### (1) 摘心

トマトの果実は開花後 50 日程度経過しないと着色しないため、収穫可能日から逆算して、開花している花房から上 3 枚の葉を残して摘心します(例えば、11月上旬を収穫終了とすると9月上旬までに開花したもので収穫可能)。なお、脇芽(葉腋から上がってくる側枝)は「吸い上げ枝」として放任して残し、草勢維持に利用します。

## (2) 裂果対策

裂果は、夏～秋にかけて発生が増加します。露出した果実が直射日光を受けて高温になると表皮の老化が進み、果実内へ水分が過剰に流れ込むと、表皮が耐えきれずに裂ける現象です。そのため乾燥後の急激なかん水管理は裂果を助長するので控えます。また、急な豪雨等に対して、ハウス外には排水溝を掘り、ハウス内への水の侵入を防ぐことも重要です。

さらに、ハウス内の環境制御が重要になります。ハウス内の湿度が高い状況が続くと、葉からの蒸散が抑えられ、果実への水分移動が多くなります。日の出とともに気温は上昇しますが、果実表面の温度は冷えたままのため表面が結露します。果実表面の結露水は、果皮や果梗から果実内に吸収され、これらの水分移動によって、果実内の内圧が高まり裂果が発生します。

逆に秋から冬にかけて早朝の気温が下がる時期、日の出とともに光合成が始まり、ハウス内の二酸化炭素が減るため、換気したいところですが、急激にハウスサイド等の換気を行うと、冷気がハウス内に入り込むことで果実表面結露が発生します。これも裂果の原因になります。

このように、これからの時期は特に朝の気温、湿度管理や換気管理に留意し、結露を防ぐような環境づくりをしましょう。

## 4 ダイコン

### (1) 土づくり

完熟堆肥 200kg/a と苦土石灰などで土壌の pH を 5.5～6.8 に調整しておきます。生育末期の根域は、主根が 180～200 cm、側根 70～100 cm に達するので丁寧に深く耕して通気性のよい土にしておきます。

### (2) 施肥量

a 当たり成分で、窒素 1.5 kg・リン酸 1.2 kg・カリ 1.4 kg で、この内リン酸全量と窒素・カリの 3分の2 を基肥に用います。追肥は生育を見ながら残りの 3分の1 の窒素とカリを 発芽後 25 日頃 に畝間に行います。

### (3) 栽植距離

畝幅 60 cm×株間 20～25 cm、3～4 粒/1 穴まきが一般的です。間引きを本葉 7～8 枚までに行います。

地大根の場合は、1 条播きの場合、畝幅 45 cm×株間 10 cm (または、畝幅 30 cm×株間 15 cm) です。

## 5 ハクサイ・キャベツの追肥

### (1) ハクサイ

結球の始まる少し前の本葉 10～12 枚まで (移植栽培では定植後 20 日頃まで、直播きでは播種後 35 日頃) に行います。標準的な施用量は、窒素 8～10 kg、カリ 7～9 kg/10a で、1～2 回に分けて行います。

ゴマ症は生育後期の過剰な窒素吸収が発生要因とされ、収穫の遅れ、窒素の多施用、低温による肥効の遅れ等が発生を助長するよう要因としてあげられ、特に収穫が遅れて過熟となり、葉の老化が進むと多発するので適期収穫に努めましょう。

### (2) キャベツ

窒素、カリとも球肥大初期までに行います。球肥大初期以降の追肥は急激な球肥大を助長し裂球の原因となるので遅れないようにしましょう。標準的な施用量は、窒素 7～10 kg、カリ 6～8 kg/10a で、2 回に分けて行います。